

新 島 淳 良 著

## 『毛沢東の思想』

勁草書房、1968年、472ページ。

中 西 功 著

## 『中国革命と毛沢東思想』

青木書店、1969年、354ページ。

### I 論争ならざる「論争」

昨年暮から今年の初めにかけて、中国革命と毛沢東思想についての興味深い研究が二つ発表された。新島淳良氏の『毛沢東の思想』と中西功氏の『中国革命と毛沢東思想』である。

執筆当時、そしておそらく発刊当時も、新島・中西両氏ともお互いの著作について知らなかったであろう。だから二つの著作は相方ともお互いの著作についてなんらの言及もしていない。だがそれにもかかわらず、この二つの著作は偶然にも多くの点でまっこうから対立する見解を提起しあい、間接的に鋭い「論争」を挑みあう破目にたちいたっている。

「論争」は中国の「プロレタリア文化大革命」に対する新島・中西両氏の評価の相違を根底におきつつ、それを生み出すにいたる両者の中国革命史理解のあり方全般にわたって展開されている。また「論争」は著者たち自身の中国革命に対する分析と同時に、中国革命の指導者毛沢東の革命理論に対する理解の仕方を通しておこなわれている。二つの著作は、題材のうえでも方法論においても一定の共通点をもっているわけである。

「論争」点是中国革命の性格、革命によって樹立された権力の性格、革命の指導者と同盟勢力、およびその指導者＝中国共産党と毛沢東の理論と政策の評価、中国革命と世界革命との関係、今日の事態への歴史的継起性と断裂の問題等々と、多岐な面にわたっている。

新島・中西両氏の著作をあわせて書評せよという本誌の要望にそおうとする場合、単に両者の個別的な紹介と問題点の指摘を行なうのであればあまり意味がないと思われる。わたくしがあえて両著を「論争」としてとらえるのは、前記のように研究対象とそれへの接近の仕方を同一としながら、中国革命史と毛沢東思想に対するほと

んど全くあい異なるうけとり方や結論を出し、そしてそれが今日の文革評価につながっていること、またそのおのおの文革評価が今日の日本の左翼陣営における二つの相違する意見をほぼ表わしていると思われること、などのために、2著作を通して中国革命に関する研究、およびそれを志す際の研究姿勢のおおよそその問題点が浮きぼりにされうと考えるからである。

とはいえわたくしの能力と紙面の都合上、「論争」点全般にわたる整理はさしあたって不可能である。そこで小稿では、両著に直接的に重なる中国革命史の部分の大革命時期から抗日戦争時期までを、書評の対象としてしぼることにした。新島氏の『毛沢東の思想』では、第1部「毛沢東の中国革命論——中国プロレタリア革命史序説——」（120ページまで）が、中西氏の『中国革命と毛沢東思想』では、第1章「中国革命史について」（41～60ページ）と第3章「第1次大革命」、第4章「ソビエト革命」、第5章「抗日戦争時代」（127～273ページ）までである。

小稿の対象外とした部分もいちおう書評の体裁上ここに記して読者の便に供する。

新島氏『毛沢東の思想』

第Ⅱ部 毛沢東の哲学思想

第Ⅲ部 毛主席語録の周囲

第Ⅳ部 雑録

このうち第Ⅱ部の部分は氏の前著『毛沢東の哲学』（勁草書房、1966年）の意見を若干修正していて、併読すると興味深いものがある。

中西氏『中国革命と毛沢東思想』

プロローグ

第2章 今日の毛沢東路線——中国の闘う二つの路線

第6章 人民民主主義革命——革命勝利の段階

第7章 社会主義革命への転化

### II 基本的な「論争」点——両者の姿勢の相違

新島氏が本書を著わした意図は従来の「常識」「定説」を打破するにあった。氏のいう「常識」「定説」とは、中国革命が新民主主義革命の段階とプロレタリア社会主義革命の段階との二段階革命であるとされてきたことである。これに対して新島氏は「言葉を、その形式、その上層構造だけでなく、その深層構造において、その意味を理解するならば、毛沢東の中国革命の理論は終始一貫してスターリン主義の対立物なのであり、中国

の連続革命の一步一步はスターリン主義への現実的批判だったのであり、プロレタリア階級文化大革命の全面的勝利は、中国におけるスターリン主義の最終的破産なのである。『常識』『定説』とはまさに正反對なのだ(126~127ページ)と述べて、「常識」や「定説」に挑戦し、それによって中国革命史の書換えの意図を明確に示した。巷間に伝えられるところでは、今回の文革のさなか、中国でも革命史の書換え作業が準備されつつあるといわれ(それはすでに劉少奇や鄧小平の評価の変化となつてあらわれているが)、新島氏はそれに一步先んじて事を行ないはじめたわけである。しかも新島氏の書換えは、個々の具体的事実や理論の再検討などという細かいところではなく、根本的な革命理論そのものについて行なおうとするものであった。中国革命をプロレタリアートのヘゲモニーの下で世界革命の一環にくみこまれたブルジョア民主主義革命であり、二段階連続革命であるとする考え方は、毛沢東も指摘しているように(『新民主主義論』)、コミンテルンの指導下で1920年後半以来形成されてきた中国共産党の革命理論の中心シエマではあったが、これを定式化したのは毛沢東である(新島氏流に言えば、そのようにいわれてきたにすぎないのだが)。中国革命の過程での中共の戦略戦術はすべてここから出発しているし、各時期の綱領や政策もこれに基づいて提起されてきた。

今年4月の中共九全大会での林彪報告も「毛主席は、はやくも中国革命が新民主主義革命から社会主義革命に転換する前夜に、云々」(『北京週報』、4月30日号、18ページ)と、革命の転換を明確に指摘し、二段階連続革命論を継承している。これからみると、今日のように毛沢東思想が絶対化されている中国でも、毛沢東は二段階連続革命論者であったということが認められているから、新島氏はこれに対してもまっこうから挑戦して、九全大会にみられる中共の毛沢東思想の理解の仕方はまちがっているといいたいわけである。毛沢東の革命理論の理解については新島氏が中共九全大会か、どちらかがまちがっているのであろうが、とにかくにも新島氏の手にかかっているのは、九全大会すらも「常識」「定説」化され、毛沢東思想をその「深層構造」から理解せず、ただ言葉のうえでだけ理解しているものとみなされるはずのものとなる。

ではなぜ(今日の中共をも含めて)あやまった毛沢東理解が「常識」化・「定説」化されるにいたったか。新島氏によると先の引用にもある「スターリン主義」への

遠慮から毛沢東もはっきりといえなかった理論が、さらに、「スターリン的理解」によって歪曲されたからである。つまり毛沢東自身が自分の理論を「二段階のプロレタリア革命論」であるといえなかったのは、「スターリンと決裂してはならないから」であったという(112~113ページ)。要するに毛沢東はスターリンに対して「形式的には従い、実質的には背いた(面従腹背)」というのである。しかしこの面従腹背にしても新島氏のように「言葉……その深層構造においてその意味を理解」する者でないかぎりには理解しえないのであるから、たとえば「新民主主義論」を読んで、わたくしなどのようにどう読んでも二段階革命論としか読みとれない人間が、けっきょくスターリン主義的な理解に陥り、「定説」「常識」を形成してきたことになる。このように毛沢東の理論とスターリンの理論とを対立的にとらえらるゝとらえ方は新島氏に始まったことではなく、ドイッチャーやシュウォルツなどのようにスターリニズム批判者やマルクス・レーニン主義に批判的な中国研究者らによっていわれてきたことである。しかしこれらの人々の中でも、おそらく新島氏のように「終始一貫して」両者が対立していたと断言した人はいない。この点でも新島氏は新しい観点を出し、スターリンやコミンテルンと中国革命との関係での革命史の書換えに新しい1頁をつけ加えたといえるが、それにしても問題なのは、新島氏のいっていることが、毛沢東の言葉の「深層構造」から理解しない人にはわからないという難点があることである。今日の時点に立てこそ新島氏の主張も理解しうるのだが、革命のあの緊迫した激動するさなかに、しかも平明でわかりやすく大衆的に語りかけることが革命家として要請されていた時に、語りかけられ説得される人々(圧倒的多数は哲学者やインテリではなく労・農大衆、兵士たちであった!)に向かって、自分のいっている言葉の「形式」はこうだが、実はその「深層構造」は全くちがった意味なんだ、それをわかってもらわねば困る、などということができののだろうか。わたくしは毛沢東はそんな非大衆的な、面従腹背的な態度をもって革命の大衆に呼びかけたような革命家ではなかったと思う。平易に、簡明に革命の性格や権力の性格、それに基づく政策を語り、それらを理解させようとしたのであり、それだからこそ多数の大衆はかれを指導者と仰いで決起したのではないのか。いまさらになって、あの時いていたことの本当の意味はこうだったと「真相」をうちあける、このような新島氏流の理解に従えば、毛沢東は自己の権力を守るためにきゅうき

ゆうとしていた陰謀家、大衆にとってはペテン師だったというに等しい。毛がスターリンやコミンテルンに対して面従腹背的だったという説は必ずしも目新しくはないが、人民大衆に対してもそうであったというのであれば、それは全く新しい説である。こうしてスターリンを欺くために（そして同時にそれは中国の革命の大衆をも欺いた）語られていた毛沢東の言葉、理論は、今や新島氏の手によってその「深層構造」から明らかにされ、毛沢東の理論に従ってくみ立てられ書かれてきたはずの、また中共の九全大会も継承した革命史は、今や新島氏の手によって一片の「定説」「常識」として反古にされ、根本的なところで書き換えられようとしているのである。

新島氏のこのような先進的な姿勢に対して、中西氏のそれは従来の「定説」や「常識」の線に沿った、まだるいほどに墨守旧慣的なものである。中西氏のこの著作の意図は、新島氏とは逆に、毛沢東選集の書換えにみられるような、今日の時点、今日の事態を正当化するために過去に遡って歴史を書き換え、それによって毛沢東思想が一貫したものであったとか、全く誤りをもっていなかったとかされる考え方に反対するものである。過去の個々の時点や個々の事態において発出された個々の資料や文献がその時点でどのような意味をもっていたかを検討し、それらの積み重ねの結果として今日の事態や理論が出てきたものと中西氏は考える。かれもまた新島氏と同様に中国の今日の事態からしてもう一度過去の歴史、毛沢東理論の形成過程を検討しなおそうという気になったには違いないだろう。しかしそこには今日の事態や理論にあわせて過去のことを解釈しなおそうとする新島氏のような姿勢はない。したがって氏の著作は一般的にはむしろ考証的側面、文献や資料がその段階段階でもっていた意味の解釈に重点がおかれている。そしてその積みあげとして毛沢東理論（思想）や中共の革命論の歴史的形成過程が検討される。今日の中共の事態や理論を誤ったものと認識する中西氏は、それを導き出してきた歴史的経過を重視するのであり、過去の闘争や理論の厳密な批判・発展的継承の仕方が問題とされるのである。迂余曲折を経ながらも勝利的に中国革命を導いてきた中共や毛沢東が、その理論形成の過程で味わったさまざまな苦悩、試行錯誤、その止揚こそが中国革命の勝利を導き出したものとする中西氏は、したがって新島氏のように「一貫した」ものとして毛沢東理論を考えようとはしない。

ふりかえってみると、かつて日本の革命家として中国

革命にかかわってきた人で、中西氏ほど中国共産党に高い評価を与えたものは少ないだろう。かれはその著『中国共産党（ソヴェート革命時代）』のはしがきで「私がこの著述を通じて、是非示したいと考えていた第1のことは、現在の中国共産党の政治的・理論的水準が如何に高いかということです」と述べ、また別の個所でも毛沢東の理論と中共の偉大さに惜しみなく賛辞を呈している。このように中西氏は中国革命における中国共産党の役割、そのすばらしさに傾倒してはいたが、それはかれの考える日本革命との関係で、中共の革命論や指導性を教訓的に受けとめようとしたからであった（『歴史評論』に連載中の「中国革命の嵐の中で」を参照）。それゆえ中共に対して過去の傾倒ぶりから一転して今日の批判・反対の立場に至ったのも偶然ではない。中西氏には日本の革命にとつてこそ中国の状況や理論が問題となりうるのであるから、それが日本の革命運動にとってマイナスの要因となる場合には当然、批判・反対の対象となる。今日の日本での政治的立場との関係で中国の状況を見ることは新島氏の場合も全く同様である。両者の違いは、新島氏が中国の現状や理論により密着してそこから中国革命史を再検討し、解釈しなおし、またそこから日本の現状や革命の問題をも見直そうとするのに対し、中西氏の場合はこの発想が全く逆になっていることである。戦後から最近に至るまで、中国研究に関する発言をさしひかえてきた中西氏が、最近に至って再び活発に発言しはじめたのは、この間の日本での政治活動の経験とその総括の上になつて、今日の中国の事態とその日本への投影に黙っておれなくなったからであろう。

中西氏にとって今日の中国の状況は、まさにかれが傾倒してきた中共や毛沢東の理論、つまりは「定説」や「常識」の破壊によってもたらされたものと意識される。しかもそれは「常識」や「定説」の形成過程でのあいまいさや混乱（過渡期理論などにみられる）が、それらをもたせた原因との関係で究明されるのではなく、今日の「毛沢東派」の権力掌握と毛沢東思想の「絶対化」のために、一方的に権力的に抹殺されてしまおうとしているものとみる。したがって中西氏は「常識」や「定説」の形成過程にあったさまざまなあいまいさや矛盾を、たとえ表面的に抹殺して歴史を一貫した統一したものに書き換えても、依然としてあいまいさや矛盾は残るものと考え、それゆえにこそ今日の時点でもう一度さかのぼって各時点でのあいまいさや矛盾を個別具体的に検証してみる必要性を痛感するのである。

以上のように新島氏と中西氏との姿勢の相違は、今日の事態を容認しそれを正当化するために「定説」「常識」の根本的書換えをおこなうか、または、今日の事態を不正常的なものとみ、それが「定説」「常識」からの逸脱、もしくはその形成過程でのあいまいさ、矛盾の徹底的究明の欠如によってもたらされたものと考えて「定説」「常識」を補完し、その精神に復帰することを主張するか、そこにあるように思われる。

このようにきわだって異なる内容をもった両著が、逆説的ないい方をすれば奇妙にも結論的には一致しているのは皮肉といわねばならない。すなわち中西氏は次のように述べている。

「その点で(新民主主義革命からプロレタリア革命への革命転化期においてプロレタリア独裁の問題を声を大にして強調せず、プロレタリア独裁が体制となっている今日にこのことを特別に強調していること)問題の根本は新民主主義革命が勝利したとき、毛沢東や中共が新民主主義革命から社会主義革命の転化の問題を忘れ、新民主主義から社会主義への自然成長の立場にたったことにある。……その根底には、社会主義革命を解消する社会主義の自然成長的な考え方が横たわっていた。しかも、その社会主義への自然成長論は、中国革命論においては、新民主主義革命と、社会主義革命との区別と関連を否定し、1949年の中国革命の勝利が新民主主義革命の任務も社会主義革命の任務も一挙に遂行したという考え方(一回革命論)に発展せざるをえなかった」(352～353ページ)と。

要するに中西氏は、新島氏の主張が今日の中共の発想と見事に一致していることを証明してみせたのである。換言すれば、先に示したように林彪報告も、「常識」「定説」に従ってはいるが、実はその従い方が問題なのだと中西氏はいいい、新島氏はその問題の「従い方」を大胆に赤裸々に先走っていつているにすぎないということになる。わたくしが両氏の結論は一致しているといったのは批判的か肯定的かのちがいはあっても、また表現の仕方にながいはあっても、今日の中国の理論状況の分析内容において一致しているということである。分析した内容に左右されてみずからの問題意識をどのように反応させていくかという問題とはおのずから異なる。

### Ⅲ 若干の「論争」点の整理

いずれにせよ次に問題とされねばならないのは「定説」「常識」の内容である。それが両者によってどのように

うけとめられ、どこで対立し、どのようにしてまっこうから異なる結論に分岐してしまうのか。この点を明らかにするためには両著を具体的に詳細に分析せねばならないが、早くも与えられた紙数を費してしまった。ここでは問題点の指摘だけにとどめざるをえない。その場合でも中西氏のほうは革命史の問題点を全般的にひろいあげようとしているのに対し、新島氏は特にかれにとって問題となる点、つまり、先の根本的な書換えを立証するに足るだけの範囲のみに論述がしぼられている。したがって「論争」点の指摘にあたっては、新島氏が提起した問題点に従って整理するのが妥当であろう。

#### 1. スターリンおよびコミンテルンの評価

新島氏が中国革命、とくに大革命の敗北の責をスターリンもしくはコミンテルンに負わせ、その克服過程として毛沢東理論の勝利をうけとめるという善悪二元論的立場をとっていることは明らかである。これに対して中西氏は、1926年の12月決議やコミンテルン第7回大会での人民戦線などにみられるコミンテルンの中国革命への影響、指導性を高く評価している。中西氏はコミンテルンなしには、とくに初期中共の革命指導はありえなかったものとする。ここから大革命期の評価に大きな差異が生ずる。つまり新島氏はこの時期には毛沢東のオリジナリティーは必ずしも明瞭でなかったことから相対的に低く評価せざるをえない(中共の独自性は全くふれられない)し、中西氏の場合はコミンテルンの指導下に瞿秋白らの優秀な中共黨員が輩出して、中国革命の基本的な問題点はほぼ出そろったものとみなし、きわめて高く評価し重要視することになる。

#### 2. 革命権力論

新島氏は毛沢東のオリジナリティーとしての「地方赤色政權」論を高く評価し、これを基本的にプロレタリア独裁の権力とうけとめている。中西氏は、地方赤色政權ソビエト＝根拠地論はコミンテルンの功績であり、新島氏とは全く逆に、これが権力の性格としては労働民主独裁であるのに権力の形態としてソビエトを採用したために、セクト的・極左的傾向をもたざるをえないプロレタリア独裁的政策(ロシア革命のいきうつしの)をとったところに失敗の原因があったものとみている。

#### 3. プロレタリアートのヘゲモニーの問題

これは、新島氏の革命史書換えの根本的な問題点である。「プロレタリア階級の指導によるブルジョア民主主義革命」は「終始一貫、トロツキーの主張したところ」であり、この点に関する毛沢東の主張はトロツキーの中

国革命論と大筋において一致し、この点を革命論においても政策面においても強く主張しなかったところにスターリンの誤りがあったとされる。これは後の抗日民族統一戦線論においてもそうである。新島氏によるとプロレタリアートの指導するブルジョア民主主義革命＝新民主主義革命とは本質的にプロレタリア独裁であるという先の権力論と結合する。逆にいえば、本質的にプロ独裁であるものをブルジョア民主主義革命に力点を置いてプロのヘゲモニーの問題を軽視してしまうところにスターリンやコミンテルンの誤りの根源があることになる。中西氏はそうは考えない。コミンテルンはプロのヘゲモニーを重視した。しかし問題は、その時の情勢と任務にてらしてどのようにプロのヘゲモニーを発揮し貫徹するか、その仕方を誤れば極右にも極左にもなる。中西氏にいわせればソビエト権力のあり方がその失敗の例証であり、八・一宣言以後の抗日民族統一戦線がその成功の事例ではないかというわけである。

#### 4. 統一戦線の問題

ここにおいて統一戦線というものに対する考え方が、その歴史的経過（中国では大革命期の国民会議やのちの政治協商会議、コミンテルンでは第2回大会や第7回大会での方針）との関連で大きく評価が分かれる。特に抗日民族統一戦線の形成過程とその内容、およびその後の中共の革命論の中で占める位置などのうけとめ方は、新

島氏と中西氏とではまるで反対になっている。たとえばソビエト革命から1935年の遵義会議、八・一宣言の発表、12月の瓦窯堡会議へと経過する統一戦線論の発展過程を例としても、新島氏はコミンテルン路線と毛沢東路線の対立抗争関係としてとらえるし、中西氏は歴史継起的な関係としてとらえる、といった具合である。これは単にある事件に対する解釈の仕方、事実問題に対する接近の仕方の相違といった問題ではなく、両者の間に存在する革命観、哲学の相違といった深淵を感じさせるほどのものである。

このように問題をあげていくと、わたくし自身の問題意識も際限なく広まってゆき、收拾がつかなくなってしまふ。両者の比較検討からは汲めどもつきぬ深い味わいを見いだすのである。上にあげた四つの点はそのほんの一端であり、またわたくし自身の両者に対する見解の表明は留保せざるをえなかった。なによりもまずこの両著の内容を含味することから始めねばならぬこの書評が、紙面とわたくしの能力の余裕のなさから、結論めいたことから先にいってしまわざるをえなかったために、読者諸賢には、きわめて不親切な結果となってしまったと思う。擱筆するにあたり深くお詫びするしだいである。

（日本国際問題研究所 姫田光義）

#### アジア経済研究所刊行

##### 中国経済発展の統計的研究 (I)

一橋大学教授 石川 滋 編

300頁 罌 680

▷中国の公式国民所得統計吟味(石川滋)▷中国における物価指数資料の検討(溝口敏行)▷中国の人口構造(吉田忠雄)

##### 中国経済発展の統計的研究 (II)

一橋大学教授 石川 滋 編

330頁 罌 900

▷第2次5カ年計画期における雇用・賃金構造の変動(石川滋)  
▷中国と日本の物価比較(溝口敏行)▷中国の公式工業生産指数の吟味(溝口敏行・松田芳郎)▷中国の経済成長と中ソ貿易(山内一男)▷中国における農業生産力構造とその変化(常盤絢子)  
▷中国の人口構造と労働人口(吉田忠雄)

##### 中国経済発展の統計的研究 (III)

一橋大学教授 石川 滋 編

310頁 罌 900

▷資本蓄積と技術選択(石川滋)▷中国の物価体系の吟味(溝口敏行)▷中国の経済成長と対西欧貿易(山内一男)▷中国農業生産統計の一吟味(松田芳郎)▷生産合作社の成立と農業生産力構造の変化(平野絢子)